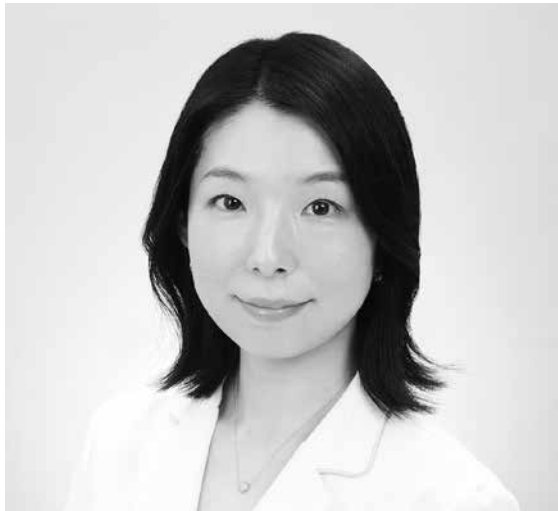


**ICE iPS技術を起点に地方創生へ
産学連携による社会実装を目指す**



取締役／Cell Sommelier

加賀谷梨恵 氏

託製造の枠組みを超えた新たな付加価値を創出している。一般的に、一方の開発や製造受託とは一線を画す同社の取り組みは、先端技術の社会実装を起点に、研究背景の掘り出し、歴を持つ。自ら複数のiPSCコスメブランドをゼロからベストセラーへと導いた実績は、机上の空論ではない「売れるモノづくり」の裏付けとなっている。

加賀谷氏の存在は、製品のデザインやパッケージ選定にも大きな影響を与えている。薬事法規の厳格な遵守と、消費者の購買意欲を喚起するマーケティング視点の双方から助言を行う体制は、新

品化後の支援体制で、メディア向け説明会や医療スタッフへの勉強会を通じて科学的根拠に基づいた販売戦略までを伴走し、製品を「作る」段階で終わらず、市場でいかに語られ、選ばれるかという出口戦略までを一貫して設計する姿勢だ。

また、同社は「PS技術を単なる『高機能原料』として扱うことに警鐘を鳴らす。iPS細胞が生命由来であり、長期にわ

美容医療機関
新たな体験や

ICEが重視するもう1つの軸が、美容医療機関との提携だ。これまでのエステや脱毛サロン、ヘアサロンなどからさらに発展して登場したiPS提携クリニックは、iPS技術を活かした次世代の美容施術を体験できる新しい場だ。

iPS由来技術は、化粧品として日常的に使わ

との提携により、**サービスを提供**するだけでなく、アンチエイジング治療やフェイシャルケア、頭皮・頭髪ケアといった美容医療の現場において、より高いレベルのアプローチとして活用されている。

ICEでは「コンプレックス・ドクター」という考え方を掲げる。それは、見た目の美しさだけでなく、人が長年抱えて

合う、美容と美容医療を包括したサービスを起点としている。

iPS提携クリニックでは、iPS由来技術を用いた医師の判断のもとで美容医療の現場に応用している。その対象は、肌や頭皮といった外見領域にとどまらず、薄毛やニキ

ビ、アトピー傾向の肌、さらには加齢に伴う変化など、いわゆる「コンプレックス」と呼ばれる悩みを抱える人々にも広が

iPS細胞は「何にでも変化できる万能細胞」であり、ほぼ無限に増える強い力を持つ。美容分野では、iPS細胞そのものを使用することではなく、iPS細胞を培養する過程で得られる知見や、培養技術から生まれる素材に注目が集まっている。

エクソソームなど、細胞同士の情報伝達に関与するとされる良質なタンパク質群が豊富に含まれている。

美容領域では、これらを化粧品原料の1つとして活用し、肌や頭皮を健康な状態に保つことを目的とした処方設計や、美容施術への応用が検討

**iPSコスメO
社会実装を製**

同社の戦略の柱は、iPS細胞由来の原料を用いた化粧品受託製造（OEM）事業だ。ICEが手掛けるiPS細胞由来培養上清液を活用したコスメOEMは、従来の受

EMで先端技術の
商品設計から支援

ある。

「再生医療の研究成果から派生したiPS由来培養上清液は、スキンケアやヘアケアといった美容領域のみならず、深刻設計している点に特徴がな『コンプレックス』

り下げから品質管理、市場訴求までを一気通貫で設計している点に特徴が

IC Eが貫く生命科学の物語

「作る」から「語る」までを一貫支援

た高付加価値製品において、極めて高い親和性を発揮している。

同社の開発実績は多岐にわたり、頭皮環境の改善を目的としたスカルプケア製品や、クリニックや、美

や男性向けケア、さらにはフェムケアといったターゲットの細分化が進む中、ICEのOEM体制はさらなる広がりを見せている。高価格帯のプライベートブランドや、美

規参入を図るクライアントにとって強力な後ろ盾となる。特筆すべきは商

たる培養・管理を経て確

薬事法規への対応や販売時の説明設計までをパッケージ化した当社の支援体制は、先端技術を消費者の手に届けるための強力なブリッジ役を担っている」(加賀公氏)

立される技術である点に
きた悩みや違和感に向き

「iPS細胞培養上清液」が美容業界の新たな選択肢に

iPS細胞（人工多能性幹細胞）は、皮膚や血液などの体細胞をもとに作製される細胞であり、再生医療や創薬分野を中心に研究が進められてきた。

その代表例が「培養上清液」だ。培養上清液とは、細胞を培養する際に、細胞が分泌した成分を含む培養液のこと。iPS細胞由来のものには、成長因子・サイトカイン・

iPS細胞由来培養上清液は、「即効性のある効果」をうたえる点ではなく、肌や頭皮を取り養う環境に着目した設計が可能になる点に特徴がある。

スキンケアやベースメイクでは、日常使いの中

を意識した処方に組み込みやすく、美容医療の現場では、フェイシャルや頭皮ケアといった施術と組み合わせることで、より高付加価値な美容体験を設計できる素材として位置づけられている。また、iPS由来であること、ア・脱毛エステ大手や上場企業とともに、iPS細胞コスメを製品化してきた。iPS培養上清液は、化粧品と美容施術の両方で使われる可能性を持つ素材として、美容業界の中で新たな選択肢になりつつある（加賀公民）

や頭皮のコンディションを多角的に整えることが可能だ」（加賀谷氏）

単一成分の効果に依拠するのではなく、生体が本来持つ環境やバランスを補完する設計思想は、加齢に伴う変化や慢性的な肌の悩みに直面する消費者層をターゲットとし

性を活かしたまつ毛・目元用美容液は、エイジングケアを重視する層から支持を集めるなど、iPS技術ならではの多角的な商品設計が具現化されている。

医師監修の専売ライン

iPS 細胞

「消費者が重視するのは、iPS由来成分を配合しているという事実そのものよりも、製品がどのような研究背景と技術基盤のもとで開発された

iPS細胞技術はこれまで、再生医療や創薬など医療分野を中心に発展してきたが、近年は応用領域が化粧品分野へと広がりとつある。こうした潮流の中、iPS由来原料を実際の処方・商品として具現化する化粧品事業を軸に存在感を高めているのがICE（アイス、本社〓東京都新宿区、阪本欣也代表）だ。同社はiPS細胞由来培養上清液を配合したクッションファンデーションのO・T・E共同開発をはじめ、大手メーカーと連携したフェイスマスクの商品企画を推進するほか、iPS企業との協業によるAー処方技術の開発やマーケティング会社との連携による再生医療技術と美容マーケティングの融合、容器メーカーと連携した構想準備中の独自サービス「iPS Private Ceellar」による個別設計型パッケージの開発など、周辺領域との連携を加速させている。

ICEでiPS細胞美容ビジネスを推進する加賀谷梨恵氏（取締役／Ceell Somme lie r）に、現在の主な取り組みや今後の展望を訊いた。

とは、原料の由来や培養プロセス、管理体制が明確であるという点でも重要だ。これは、クリニック専売コスメやオーダーメイド化粧品など、背景やストーリーが重視される商品づくりにおいて、説得力のある要素となる。

「ICEでは実際にこれまで、原料の採用基準が極めて厳しハヘア女



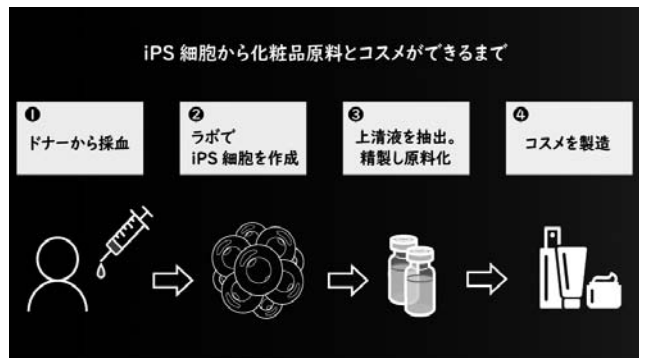
を抱える 専売のラグジ
層へのソ エアリーなフ
リユーシ エイシャル美
ョンとし 容液など、専
て期待が 門性の高い領
高まって 域で着実な成
いる。こ 果を上げてい
の素材に る。
は、細胞 特に、肌と

原料とコスメができるまで

③ 上清液を抽出。
精製し原料化

④ コスメを製造

着目し、その研究背景や製造プロセスを含めて価値設計に組み込む。研究、製造、薬事、マーケティングを分断せず、生命科学としての科学的根拠を製品設計の軸に据えることで、流行に依存しない持続的な説得力を確保し





「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を



「化粧(Cosmetics)」という、人間の
五感とQOL(生活の質)
に直結する3領域をバラ
バラに学ぶのではなく、
相互の関連性を学べる点
にある。

「化粧(Cosmetics)」という、人間の
五感とQOL(生活の質)
に直結する3領域をバラ
バラに学ぶのではなく、
相互の関連性を学べる点
にある。

「化粧(Cosmetics)」という、人間の
五感とQOL(生活の質)
に直結する3領域をバラ
バラに学ぶのではなく、
相互の関連性を学べる点
にある。

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を

「ICEでは、コンパ
打ち出す「プライベート・
ウィンテ
ー」の範
嚆を